アマガミ　―その後―
～棚町薫～

おわり

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恋人同士となった棚町薫と橘純一の、その後のお話し……。

目次

1．最初の試練 ―― 1
2．純一と薫母 ―― 14
3．薫母との再会 ―― 33

1．最初の試練

「ええ!?僕も相席するの!?」
「いいから付き合いなさいよ!･それともアンタは可愛い彼女のお願いも聞けない、甲斐性無しっていうつもり!?」
「うぐっ・・・」

腐れ縁とか、悪友とか、悪い関係と言えなくもないが、傍から聞いてとても「男女の仲」と言える関係性ではなかった棚町　薫と橘　純一。
紆余曲折あったものの、互いに気持ちを伝え合う事により、恋人関係を結んでいた。
恋人同士となった彼らの最初の試練。棚町　薫の、新たな父親となる者との食事会である。

＊

彼女は幼少時、父親を亡くしている。兄弟もおらず、女手一つで彼女を育ててくれた

母親。
その母に負担は掛けまいと彼女は、家事手伝いの他、多くのアルバイトをこなし、弱音も吐かずに二人でコツコツとやってきた。
そんなある日、突如出てきた母親の再婚話。
彼女は酷く困惑した。
その時彼女は、亡き父親の存在を否定されているように感じられた。
父親の事が大好きだった彼女にとっては尚の事であった。
重ねて、母親へ負担を掛けない様にと努力を積んできた彼女にとってのそれは、彼女の頑張りが不十分だと、そう暗に伝えられているような錯覚に陥らせた。

「二人でずっとやってきたじゃない・・・」
「新しい父親なんていらない！」

親友の田中　恵子にも、それこそ腐れ縁と言わしめる程の純一にも、そんな弱い姿を見せた事がなかった。見せたくなかったし、見せられなかった。
母親に負担を掛けない為にも、彼女は強くあらねばならなかったから。
その反動からか、母親から裏切られた様に感じていた彼女は、酷く弱っていた。

そんな時、傍に居たのは、純一であった。

「泣く事は、弱さじゃないよ」

欲しい時に欲しい言葉をくれ、口にせずとも想いを理解してくれる彼に、彼女は友人としての想い以上に、異性としての好意を寄せるようになっていた。

素直にその感情を「好意」と認められず、色々と振り回してしまう事もあったが、彼はいつも付き合ってくれた。

そして彼への好意を明確に認識したとき、彼女は初めて気付く。

ああ、お母さんも、同じなんだ、と。

お母さんにも、好きな人が出来ただけなんだ、と。

亡き父親を忘れた訳ではなく、二人の生活が苦しくなった訳でもなく。

ただ一人の女性として、恋に落ちただけなのだ。

「お母さんと、ちゃんと話し合いなよ」

彼に優しく背中を押してもらい、彼女は母親と再び話し合いをする。

そうして、親子二人は和解をするに至るのであった。

…あったのだが……

「それとこれとは話が別よ！」
「そんな事言われても・・・」
新しい父親とのお食事会は明日の昼。
元旦を目前に控えた冬休み、彼らの気が休まることはなかった。

＊

「それで来てくれるの!?相席してくれるの!?どっち！」
「それどっちも同じじゃないか！…仕方ないなぁ」
「ホントに!?来てくれるの?」
単純に気まずいという事もあるが、それ以上に不安だった。
お母さんが選んだ相手とはいえ、どんな男が来るのか、どう接すれば良いのか、
「お父さん」と呼ばないといけないのか。
少なくとも、今までの二人の生活が大きく変化する事に間違いはなかった。
「でも…ホント迷惑だったら、無理して来なくても…」
「いくよ」
即答だ。薫が不安を抱えている事は目に見えていた。

口では「仕方ない」なんて憎まれ口を叩きながらも、始めから断るつもりは無かった。
「全く、そんな顔でお願いされたら、断るに断れないじゃないか」
「え…そんな顔、してた？」
「バカ、何年一緒にいると思ってるんだよ」
「…ん、そだね」
純一が傍に居てくれる。自分の気持を分かってくれている。それだけで、こうも安心出来るものなのか。
先程まで抱えていた不安は、どこか遠くへ行ってしまったようだ。
「てんきゅね、純一」
「…気にするなって」
それにしても、薫を女性として意識するようになってから、本当に魅力的な表情を見せる様になったものだ。
「調子狂うよ、本当に…」
先程の心からの笑顔が鮮明に脳裏に焼き付き、顔に熱が篭るのを感じずにはいられなかった。

＊

そして次の日、新しい父親との昼食会当日。
輝日東高校は既に冬休みに入っているのだが、薫と純一は高校の制服を身にまとっていた。
場所は薫のバイト先。ここで、件の会までの時間を過ごそうという腹積もりの二人である。
「どうしよう純一！何喋ればいいんだろう!?」
「落ち着け薫！とりあえず深呼吸だ！はいひっひっふー、ひっひっふー！」
「わ、分かった！ひっひっふ～…ひっひっふ～…って何やらせんのよ！」
ズビシッ！と薫の手刀が純一の側頭部をしばいた。二人の心内は、緊張感に占められていた。
純一が傍に居てくれるという想いから、不安な気持は大きく取り除かれはしたものの、気まずさや緊張までは霧散されなかった。
「全く、頼りにならないんだから～」
「無茶言うな！僕だって緊張してるんだから！」
「うそうそ、ジョーダンよ冗談。本当に感謝してるんだから」
「ホントかな…じゃあ感謝の気持を体で示してみろよ」

「いいわよ。美味し～い暖か～い珈琲を注いであ・げ・る♪」
「バイトの延長じゃないか！」
「あははっ」
ケタケタと楽しそうに笑っている薫を見て、昨日程の不安は無い様で安心した。
とはいえ自分も気を抜いてはいられないと、目前に控える昼食会に向けて一人、静かに気を引き締めるのであった。

＊

時間潰しもそこそこに、薫と純一は昼食会会場へと向かっていた。会場といっても、薫の自宅なのだが。
先のバイト先での時間潰しが功を奏したか、薫と純一は程よい緊張感の中、しかしおおよそ普段通りの心持で歩を進めていた。
薫の家も目前というところで、何と無しに、
「そういえば薫、今日僕が来る事は、おばさんには伝えてあるんだよな？」
「……」
「おい…何か言ったらどうなんだ…？」

「…純一、頼りにしてるわよ！アンタならいけるわ！」
「お前ってやつは…」
どうやら、本日の会に自分が参加することを、おばさんに伝え忘れていたらしい。緊張していたとはいえ、そこまで忘れるだろうか…。
だがもうここまで来てしまえば、開き直りもする訳で。
「しかしおばさんに会うのも久しぶりだな」
「そうねぇ、丁度2年ぶりくらいじゃない？」
「そっか、あの日以来か…」

＊

2年前の12月24日。橘純一は、クラスメイトの蒔原　美佳と待ち合わせをしていた。
待ち合わせの場所は丘の上公園。純一はそこで、蒔原美佳へ告白をしようという決意を胸に秘めていた。
しかし待人が来る事はなかった。
告白の言葉と、想いを乗せたクリスマスプレゼントは相手に渡る事無く、傍らのごみ

箱の腹をほんの少し満たすだけで役目を終えた。
　惨めな気持に苛まれながら純一は独り、トボトボと自転車を押しながら、丘の上公園を後にした。
　帰宅途中、不意に後頭部を何者かにはたかれた。
「なーにしてんの」
「…薫」
「なんでこんな所に居るの?」
　相変わらず能天気な薫だが、この時ばかりは薫を相手にする元気など、一欠片も残されてはいなかった。
「もしかして…誰かにすっぽかされちゃった?!」
「…違うよ」
　何も違わなかった。これが親友の梅原　正吉であったなら、愚痴の一つや二つ零していたかもしれない。
　だがこれでも薫は女の子。恰好悪い姿は見せたくないと、なけなしのプライドが、咄嗟に否定の言葉を吐いていた。
　少しの間があった後、
「……ねぇ、送ってよ」

「え？」
そう言うと同時に、そういえば薫こそどうしてここに？と視線で問うた。
「クリスマスケーキを取りに行く所なんだ～」
そのまま薫は続ける。
「ウチはね、毎年お母さんと二人でクリスマスパーティやることになっててさぁ」
そういう薫の表情はとても明るく、「あっ」と良いことを思いついたようで、
「そうだ、良かったらウチに来ない？ケーキ、二人じゃ食べきれないから、残ったら食べさせてあげてもいいわよ～？」
「ええ…」
悪戯っぽく薫はウインクを飛ばしてくる。しかし今は、すぐにでも自宅に帰り、押入れにでも引き篭りたい気分だった。
クリスマスイブに好きな女の子に約束をすっぽかされる。純情な少年の心に致命傷を与えるには、十分の出来事であった。
薫との邂逅で意識が逸れていたが、先の出来事に再度胸を締め付けられ、暗い気持に落ちかけていたその時、
「いいからケーキ屋さんまでは送ってよ！来るか来ないかは、その間に決めればいいでしょ？ほら、レッツゴー♪」

無遠慮な薫の声に意識を引かれる。薫は既に自転車の荷台に座っており、サドルをペシペシ叩いている。

「むぅ…」

人の気も知らないで、と文句の一つでも言おうと薫へ向き直ったが、薫の表情を見たその時、思わず口を噤んでしまった。

薫はほんの少し眉を顰め、口は柔らかに微笑んでおり、瞳は慈愛に満ち溢れていた。

その表情はまるで、泣きじゃくる弟を優しく守るような、口では「やれやれ」と言いながら、慈しむように抱擁する姉のような、そんな表情だった。

目が合うと、薫はいつもの勝気な表情でニッと笑い、

「ほら、いくよ」

「…わかったよ」

薫の表情を見て妙に気恥ずかしくなり、素直に従ってしまった。

何とも言えない面映ゆさを感じながら、先程までの落ちていた気持がずいぶんと軽くなっている事に、自身で気付いてはいなかった。

ケーキ屋までの移動中、薫はそれ以上、何も聞いてこなかった。

＊

お互い無言のまま、駅前のケーキ屋さんまで辿り着く。
「ちょーっと待っててね、ケーキすぐ取ってくるから」
自転車の荷台から、ぴょんと薫が降りる。
「買うケーキはもう決まってるのか？」
「当然！クリスマスシーズンのケーキを予約しないなんてナンセンスよ！」
薫は右人差し指をピッと立てて、大仰に語る。
「店側もそりゃあ沢山用意するだろうけどさ、それでも残り物って嫌じゃない？先手を打っておくのが、良い物を手に入れるための鉄則ね！」
そのまま右手でグッとサムズアップする。本当に薫はそういった動きが良く似合う。
「へぇ、準備がいいんだな」
「年に1度のイベントだからね、後悔したくないじゃない？」
「後悔、ね…」
後悔しない為に、少ない勇気を振り絞っての告白を決意した。だがそれは、「そんな事しなければよかった」という後悔を残す結果となった。
本日何度目になるか分からない気落ち苛まれそうになった時、
「ほら、来るんでしょ？」

先程までの溌剌な態度とは打って変わり、薫は優しく諭す様な口調で語り掛けてきた。

「…うん、行くよ」

「よし、次はあたしの家にレッツゴー♪」

「調子の良いやつだな」

薫の、直接的には言って来ないその気遣いに、心はみるみる軽くなっていた。

恰好悪いところを見せない為に真実を隠し、しかし落ち込んでいる事を見透かされ、気遣われ励まされ、あまつさえクリスマスパーティに参加させて貰うという始末。

調子の良いやつは、他ならない自分自身であった。

2．純一と薫母

夜の帳もすっかり落ち、二人を乗せた自転車は漸く目的地へと辿り着いた。
慣れない二人乗りという事もあり、純一の額には軽く汗が滲んでいる。そんな純一とは対照的に、代謝を活性化させる術を持たない薫は頻りに手を擦り合わせていた。

「うぅぅ～さっむぅ！さっさと家入っちゃおう」
「そ、…そうだな」

クリスマスケーキを手に、純一は立ち竦んでいた。
眼前にそびえる棚町家は御世辞にも大きくはなく、ストイックな様式であるが、細部にまで手入れが行き届いている様に見受けられた。
女子の家に上がる事は初体験でないとはいえ、幼少時から付き合いのある桜井　梨穂子の家とは訳が違う。

「……薫。薫のお母さんには、僕が来る事は伝えてあるのか？」

「え？言ってないわよ？」
「え、」

親子水入らずのクリスマスパーティに、こんなショボ暮れた男が飛び入り参加して良いものだろうか。
緊張と不安が純一を襲う。

「薫、やっぱり僕かえ…」
「大丈夫大丈夫！お母さん、そんな事全然気にしないから！」

薫に食い気味に遮られ、帰宅の意思は尻すぼみとなった。
ここで少し、帰宅したケースを想像してみる。
自宅には自分ひとり、両親は夜遅くまで仕事でおらず、妹の美也は友人宅でお泊り会ときている。

今独りになると寂寥感に押し潰されてしまうかもしれない…。

純一は棚町家主催のクリスマスパーティにお邪魔する意志を固めたのであった。

＊

薫は玄関の鍵を開け、からからと引き戸を引いて自宅へと入って行く。純一もそれに追従し、恐る恐るといった様子で棚町家の敷居を跨いだ。

入った途端、ふわと甘く優しい匂いが迎えてくれる。男っ気の無い家庭とは、こうも良い香りに包まれているのか。

「ただいま〜！お母さーん、ケーキ持ってきたよー」

「あらおかえりー、随分早かったわねぇ？」

奥から、薫の声を幾らか落ち着かせた様な妙齢の声が届く。

「寒かったでしょう？早く入って……あらら？」

玄関を抜け廊下を渡りその向こう、恐らくはリビングであろうか。その扉を開け、薫の母親が顔を覗かせた。

緩くウェーブの掛かった、薫のそれよりも長く艶やかな黒髪。その綺麗な黒髪をポニーテールに結わいている。

目尻の下がった優しい目は、見慣れぬ男の子を捉えている為か、少しだけ見開いている。鼻や口元は薫とそっくりだ。

薫の少し鋭い目は父親譲りかと、場違いな感想を抱いた。

「ああ、紹介するね。彼はクラスメイトの橘　純一。ケーキ取りに行く時に偶々会ったから、連れてきちゃった！」

「は、はじめまして！ご紹介に預かりました、た、橘　純一です!!薫さんにはいつもお世話になっております!!」

薫の軽い他己紹介に、思わず背筋がピンと張ってしまった。

薫の母親は顔をふにゃと和らげ、にこやかに答える。

「まぁまぁ、はじめまして。薫の母です」
「純一が自転車だったから後ろに乗せて貰っちゃった♪」
「それで少し早かったのね。たちばな…くん、だったかしら？薫がご迷惑を掛けた様で」

パタパタと玄関の方までやってくる薫のお母さん。背丈は薫より少し低いくらいか。
美人というより、どちらかと言うと可愛らしい印象を受けた。

「迷惑だなんて…。こちらこそ、お二人のパーティに突然押し掛けてしまいすいません」
「そんな畏まらなくたって平気よ純一、アタシと純一の仲じゃない？」
「ふふ、そうよ橘くん？折角来てくれたのだし…大したものはご用意出来ないけど、ゆっくりしていって頂戴？」
「…はい！ありがとうございます！お邪魔します！」

＊

「橘くん？そちらのボウルを取ってもらえるかしら？」
「はい、これですね、薫のおばさん」
「ええ、ありがとう♪」

薫の帰宅が想定より早かった為、パーティは未だ準備中であった。

「ごめんなさいね、お客様なのに手伝わせちゃって。遠慮なく手伝わせている私もアレだけど…」
「いえ、このくらいなんてことないです。他もどんどん言っちゃって下さい！」
「もう、調子良いんだから！」

普段の自分への扱いと違い過ぎるとぷりぷりしている薫はさておき、純一はすっかり棚町家に馴染んでいた。
流石は薫の母親で、人との付き合い方が巧みであった。容姿端麗な妙齢の女性に巧妙に扱われ、純一は順調に懐柔されていった。

「はぁ～やっぱり男の子は頼りになるわぁ♪みての通り、ウチは男手がいないじゃない

?ちょっと重たい物とかを運ぶ時とか大変なのよ～」
「た、確かに、これは女性にはキツいですね…！」

純一はキッチンから食卓へ、大きな土鍋を運んでいた。鍋の中は結構な量の具材が盛られている。

「お母さん…クリスマスパーティに鍋なの?」
「いいじゃない♪折角橘くんも来てくれた事だし、同じ鍋を飯をつつきたいじゃない?」
「それを言うなら同じ釜、でしょうに…なんかゴメンね?純一」
「いやいや、鍋、最高じゃないか!」
「それは良かったわ♪　それでは、漸く準備も済んだところで……せーの?」

「「メリークリスマース!!!」」

こうしてクリスマスパーティ…と言うより、デザートのケーキが粛然と控えているただの鍋パーティなのだが、どちらにせよ純一はこの状況を心から楽しんでいるのであった。

＊

鍋にどっかりと盛られていた具材を順調に消化し、追加の具を投下しようとする薫母は、何とは無しに純一へ語りかけた。

「今更だけど橘くん、今日はウチへ来て良かったの？」

今日はクリスマスイブだというのに…、そう言外に含まれている様子だった。

それを受けた純一は、今日という日に自分がどういう目にあったのか、思い出してしまった。

忙しなく動いていた純一の手と、薫のモクモクという咀嚼がピタリと止まる。

薫との遭遇時にはつい「なんでもない」というニュアンスの言葉を言ってしまった純一だったが、その一方でなんとなく薫には見抜かれているような気がしていた。

多くは踏み込まず、優しい距離で程よく接してくれる薫に、闖入者である自分をこう

も暖かく迎え入れてくれた薫のおばさんに、虚言を吐く事なんて出来なかった。

「実は今日、クラスの女の子と待ち合わせをしていたんです」

「あら！」

「でも、すっぽかされました」

「……あら…」

「……」

薫は視線を落とし、何も言わなかった。

普段は飄々としているというのに、人の機微には妙に敏い薫の事だ。やはり察していたのだろう。

先程までの団欒がずーんと重い空気に包まれる。

物理的にも雰囲気的にも明るい部屋に、サッと暗い陰が差した様だった。

自分のせいで…これではいけない、と純一は出来る限りの虚勢を張る。

「いやでもこうなるかなーなんて思っていたんです！本当です！だからそこまで気にしていないというか、はは、は…」

だんだんと語尾が弱くなっていく自分に嫌気が差した。
この場くらい最後まで貫き通せよ…と心中で叱咤するが、弱弱しい苦笑のまま薄く細い溜息が漏れるだけだった。

「純一」

薫の声が静かに鼓膜を震わせる。
そのままのトーンで、優しく続けた。

「辛かったね」

今日は薫にやられっぱなしだ。
いつもだったら常の通り「ドンマーイ！」等と言いながらバシバシと背中を叩いてくるであろう事案なのに、こんなにも優しく、こんなにも真摯に、気持を汲んでくれるなんて。
心なしか視界がぼやけ、鼻の奥がツンとする。そんな状態でありながら、純一の表情

は晴れやかなものだった。

「…なんだ薫、らしくないじゃないか」

「……！」

その純一の表情を見て、薫は人当たりの良いニッコリとした笑みを浮かべた。

「バッカねー！あんたにはアタシがいるじゃない♪」

「…そうだな」

「ちょっと!?そこはやんわりと否定しながらも内心満更でも無いですーって顔をするところでしょ！」

「僕は満更でもないのかよ！」

先の辛気臭い雰囲気があっという間に、学校に居るような、常の空気へと変えられてしまった。

本当に、薫には敵わない。

「薫」
「んー？」
「ありがとう」
「どういたしまして♪」

言葉少なくとも通じ会う二人。
出会ってまだ一年と経っていない仲ではあったが、目に見えている以上に繋がっている二人であった。

「んん～♪」

知らず二人の世界に浸っていたところ、薫母の満足そうな含み笑いが、それぞれの意識に割り込んできた。思わずハッとする二人だが、つい今しがたの事を思い出すと、図らずも顔に熱が籠る。
純一はそろ～りと薫母へ顔を向け、しかし薫は対称的にそろ～りと薫母から顔を背けていた。
二人とも表情と動作は酷似するも、行動原理が違った様で。

二人のやり取りを一通り観ていた薫母としても、その様子が殊更に可笑しく、微笑ましく、そして羨ましくあった。

「橘くん？」
「はっはい!?」

柔和な表情のまま、薫母は純一に話し掛ける。当人の意図に関わらず、どのような冷やかしを受けるのかと純一は身構えた。
薫母は柔らかな口調のまま続ける。

「自慢じゃないけれどね？」

そう前置きして、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「ウチの薫はね、かなり大雑把なところがあるけれど、頑張り屋で、しっかりしてて、不真面目だけど変なところ真面目で、自分にも周りにも結構厳しくて…」

それでね、と少し間を置いて

「すっごく優しいのよ」

見事なまでの娘自慢であった。

とは言え、純一がこれ迄薫と過ごしてきた日々の事を振り返ると、正しくその通りだなと思った。

頬に朱を宿したまま明後日の方向に目を向けていた薫であったが、母親の唐突な娘自慢に堪らず、

「やめてよ恥ずかしいから〜!」

思わず立ち上がっていた。

母親と純一とのやり取りの裏で、薫は母親の好奇の目が自分に向いてもすぐに切り返せる様、心中で仮説と対応を模索していた。

しかしこの、普段の生活ではまず出てこないであろう賛辞の数々。虚を突かれ、薫は面映ゆくも慌てていた。

「でもね、橘くん」

ここで少しだけ、薫母の声のトーンが下がった。

「薫は少し、頑張り過ぎてるの」
「そんなこと……」
「薫が支えてくれるから、つい甘えてしまっているのだけど…。家の事だって、夜御飯もたまに作ってくれるのよ?」

先よりも真剣な眼差しで、薫母は想いを綴る。

「けれど薫はまだ中学生。あなた達ともっと遊びたいだろうし、我慢させている事もたくさん有ると思うの…。でも薫の頑張りも、私たちの生活を支えているのは事実。お母さんがもっと、なんでもこなせるスーパーマンだったら良かったのだけど……。」
「そんなことない!」

薫が声を荒らげる。

「お母さん一人で頑張って、私は好き勝手だなんて、出来る訳ないし、するつもりもない！確かに、少し我慢してる事も有るよ…でも、二人で生きていくって決めた時から、そんなの覚悟出来てる！」

薫の必死な訴えを、薫母は笑顔で、ただ少し困った笑顔で見つめていた。

純一は二人の話をずっと、静かに聞いていた。

薫母の想い、薫の想いは、既にお互いの事を充分に支え合っていると思えた。ただ気になったのは、薫の言葉であった。

今日日の中学生が、「覚悟」とか、「生きていく」等という言葉を使うだろうか。少なくとも純一は、ふざけ合いの仲でしか言った事はなく、薫の本気の想いと、薫の背負っているものの大きさを、その時初めて実感した。

ふと薫母へ目を向けると、先と同じ、少し困った笑顔の薫母と目があった。

母親を必死に支えようとする薫、薫に少しでも楽をさせたい薫母。

僕に出来ることは、何か。

「大丈夫です!!」
「!」
「?」

薫は純一の突然の発言に驚き、薫母は首をかしげている。

「おばさんは今まで通り…いや、今まで以上に薫を頼ってください!」
「…でも、…」
「薫!」
「っ…なに?」
「お前は僕が支えてやる!」

純一は薫の家族ではないし、一介の中学生が他所の情事に首を突っ込むのは、烏滸がましく思えた。それでも、薫が一人で母親を支えたいという強い意思はびりびり伝わってきた。その想いを純一なりに受け止め、純一なりに出した応えだった。

ただ……

「「…」」

棚町親子は二人してポカンとしている。

純一も特別何かしらの反応を期待した訳ではないが、この反応は想定外だった。見切り発車だったかと、何か自分でフォローを入れようとしたその時、

「よ…ヨロシクオネガイシマス…？」

僅かばかり頬を朱に灯している薫が、おずおずと手を伸ばしてくる。

しおらしい薫から差し出された右手を、ゆっくりと握る。やんちゃで男勝りな薫の手は、思っていたよりずっと華奢で柔らかかった。

「こ…こちらこそ？」

「……うんっ！」

頬に少し赤みを残したままにっこりと笑う薫。

それを見てちょっと照れ臭くなり、頬をぽりぽり掻いている純一。

そしてその仲睦まじい様子を見ている……

「「ハッ!?」」

二人してバッと薫母に目を向けると、薫母はテーブルに両肘を突き、両手に顎を乗せたままの体勢で、今日一番の満面の笑みを浮かべていた。

そのまま鼻歌でも唄い出しそうで、ゆっくり左右に揺れている。

そしてウインクを飛ばしながら、純一に言うのだった。

「薫をヨロシクね？橘くん♪」

3．薫母との再会

「それにしたって、2年は空け過ぎじゃない?」
「……それは僕も全面的に悪いと思ってる」
「ホントよ全く…。何回も誘ったのに、頑なに断っちゃって!」

2年以上前に見た棚町家の玄関口は、相も変わらずストイックな様相を呈していた。
当時、薫母に薫をヨロシクされた純一と薫はあの後、なんとも言えないフワフワとした心持のまま解散した。
家族以外の女性と初めて食べた鍋は美味しかったし、あのケーキも格別であったと記憶している。
ただ、そこへ向かった経緯、クリスマス会途中での自身の不甲斐無さ、また自分が吐いた勢いばかりの発言を後日思い出した時は、思春期男子の純一にとってそれはそれは耐え難い羞恥の念に苛まれたものである。
それはもう、薫の家を避けてしまうくらいには。

とはいえあの2年前。
薫だけでなく、薫母にも救われた事は紛れもない事実。
些か時間が経ち過ぎている気もするが、その恩を返したい気持ちも勿論有る。

「…よし、行くぞ薫っ！」
「お、オッケー！頼りにしてるわよ純一！」

こうして、純一は二度目の棚町家への訪問を果たすのであった。
あの時とは違い、今は恋仲となった薫に連れられて。

＊＊＊

「た、ただいま～…」
「お、お邪魔しま～す…」

住み慣れた自分の家であるにも拘わらず、薫の動きはよそよそしいものであった。落ち着かない薫の視線はふと足下に落ち、そこに見慣れない男物の革靴を捉えた。

それは、玄関扉から廊下を抜けて向こう側、そのリビングに、自分の新たな父親になるかもしれない人間が居るという事実の確証と成り得た。
先まで落ち着きを取り戻しつつあった心も、再度忙しなく震え始める。
純一も純一で、永らく会えていなかった（意図的に避けていた）薫母に会う事もあり、その緊張の為か、マリオネット宛らのカクカクとみっともない動きになっている。
それも束の間。
玄関を入って廊下の間、当時と大きく変わっていない様子に併せ、女性のみが住まう特有の甘い香りに鼻梁を撫でられて、懐かしいような落ち着かないような心地に、じんわりと意識を奪われていた。
その意識ごと、腕を引かれてハッとする。

「……ちょっと！なにボンヤリしてるのよ！」
「ああ、いやその、久しぶりに来たな～とか、良い香りがするな～とか思って。ごめんごめん」
「香り!?あんたこの期に及んでなにレディの匂いなんで嗅いでんのよ！純一のすけべ！」
「仕方ないだろう！正直僕も色々といっぱいいっぱいなんだよ！」

「う……そうよね、もとはと言えば私が無理して連れてきちゃったもんね…。しょうがない、今のうちにしっかり堪能しなさい」
「ああ、ありがとう……じゃなくて！」
「なによー、物足りないって言うの？…な、なんだったら少ーしくらいなら、ち、直接嗅がせてやってm」
「え？」
「純一のすけべ！なんで食い気味なのよ！」
「悪かったって！だって薫良い匂いするし…」
「えっ」
「あっ」
「「……」」
「ちょっと薫玄関で何騒いで……あらら？」

要らぬ羞恥の空気に纏わり付かれながら、およそ2年振りの再会を果たした、純一と薫母であった。

＊＊＊

「薫〜？橘くんを呼ぶなら一言言いなさいよぉ〜！」

２年振りに見た薫母は当時と変わらず、薫とは異なる柔和な瞳に、形の良い眉を八の字に寄せて、とてとてと廊下を渡って来た。

艶やかな黒髪は薫と同じく、ふわふわとそのクセっ毛を強調している。長さは前に会った時と比べ、肩口にまで短く切り揃えられていた。

「お母さんごめん！これから会う事を考えると緊張しちゃって、伝えるのすっかり忘れてた！」

「んもぉ！お母さんは良いけど、あの人もビックリしちゃうじゃない〜！」

「あはは〜…だよねぇ〜」

「全くぅ……お久しぶりね、橘くん？」

母娘のやり取りに入り込めず、どのタイミングで話を切り出そうかとソワソワしていたところ、薫母から突如水を向けられた純一。その純一の口からは、堰を切ったように言が濁流の如く溢れだした。

「すいません薫のおばさん！あの時も突然お邪魔してしまったのに、今回もこんな時にまた来てしまって！たっ、大変ご無沙汰しております！あの！あの時は本当にお世話になりました！あの時の事は、本当に感謝しております！お陰さまで辛かったあの頃もすぐに立ち直る事が出来ましたし！とはいえ少し前まではまだクリスマスにトラウマと言いますか苦手意識を持っていてまだそれを拭いきれて無かったのですが！と言うかそんな事はどうでも良くて！こっ、こんなにもお礼のご挨拶が遅れてしまって本当にすいませんでした！薫さんにも大変お世話になっておりまして！その今日は本当にこんなタイミングで来てしまって！大変ご無沙汰して」

「ちょっ、橘くん落ち着いて!?」

「純一!?話がループしてるわよ!?」

純一の混沌極まる吐露は、状況も相まり、取り敢えず塞き止められるのであった。

＊＊＊

「でも元気そうで何よりだわ、橘くん」

「は、はい。この通り、ピンピンしております」

棚町母娘に宥められ、純一は少々ながら、落ち着きを取り戻していた。

ただ…

「ほーんと、その元気な姿、もう少し早く見たかったかなぁ～」

「そうよね～、別に恥ずかしがる事なんて無かったのにね～」

「ねぇ～、お母さん薫からしょっちゅう話を聞かされてたのになかなか会えなくって、悶々としてたわ～」

「お母さんが純一を呼べ呼べって言うから何度もうちに誘ったのに、いつも適当にはぐらかしちゃってさぁ～」

「……返す言葉もございません…」

棚町母娘の薄く開かれた双眸から覗く、粘りつくような視線を一身に受け、純一は座り心地の悪さをひしひしと感じていた。

とはいえ、自業自得なのであるが。

二人のじと目に耐えきれず視線を落としていた純一であったが、ふと薫母の表情がふ

わと和らいだ。

「ふふ、冗談よ♪久々に会えて嬉しいわ、橘くん」

その優しい声音に思わず顔を上げると、薫母は初めて会った時と時と同じ様に、人好きする柔和な笑顔を浮かべていた。

その面持ちを見て純一も、自然と笑顔になっていた。

全身を覆っていた強張りも、まるで剥がれ落ちたかの様に和らいでいた。

そうして見つめ合っていると、ふと薫母の瞳に、さっきとは異なる光が灯り始めた。

その眼はまるで、コイバナに花を咲かせる女子高生のような…。

「それはそうと橘くん」

「はい？なんでしょう？」

「今日ここに来て貰ったって事は、ここで何が行われるか知った上で来てるのよね？」

「は…はい、知ってます。少し前に薫に話を聞いて、それで…」

「今日、私たちの家族になるかもしれない方と出会うあなたは、どのような立場で会ってくれるのかしら？」

試す様な口調でありながら、その実全て見透かした上で敢えて言わせようとしてくる薫母に、純一も正々堂々と言葉を返した。

「はいっ！薫の傍で薫を支える、薫の彼氏として、今日はこちらへ参りました！」

その言葉を聞いた薫母は「宜しい！」と喜色満面のまま、純一と薫をリビングへと案内するのであった。

＊＊＊

「どうした薫？さっきから妙に大人しくないか？」
「ううぅ…恥ずかしいのよぅ…ばか純一」
「？　何が？」
「あんたねぇ…その天然ジゴロはなんなのよぅ……まぁそれがあんたの良いとこであり悪いとこと言えなくもないけどさぁ…ブツブツ」
「なにブツブツ言ってんだよ、ほら行くぞ薫」

「あっ、分かってるわよっ！」

純一に手を引かれながらリビングへと続く廊下を過ぎてゆく。

純一が傍に居てくれたら大丈夫。

繋がれた手を見て、大きな掌を感じて、理由も無くそんな事を思ってしまう薫。

さあ、新たな父親となる人物との、顔合わせが始まる。